

村上忠順翁顕彰会報

目 次

あいさつ

- 村上忠順の和歌..... 1ページ
- 忠順と駿府城..... 5ページ
- お 便 り..... 6ページ
- 歴史探訪記..... 6ページ
- 表紙のことば..... 6ページ
- 編集後記..... 6ページ

村上忠順翁顕彰会報

第 7 号

編集 村上忠順翁顕彰会

事 務 局

発行 平成8年3月1日



ごあいさつ

豊田市長 加藤 正一

三寒四温の季節を経て早や弥生を迎え、村上忠順翁顕彰会員の皆様に謹んでごあいさつ申し上げます。

貴顕彰会は、幕末期における偉大なる国学者村上忠順翁を顕彰し、ここに八周年を迎えられました。前年度は、忠順翁の数万首におよぶ和歌の中から選び出された歌集「蓬廬歌選」を復刊され、短歌を志す多くの市民に深い感銘を与えました。また、会報には貴重な「三河雑鈔」を紹介され、更には毎年欠かさず忠順翁の足跡をたずねる歴史探訪を実施され、会員相互の研鑽を重ねておられます。このことについても、心より敬意を表します。

論語に「温故知新」とありますが、これはまさに至言であり、明日に向かって生きようとする者にとって歴史は尽きることもない心の明かりとなります。豊田市では、これからのまちづくりのなかで「心のどこかさ」に目を向けてまいりませんが、これも「振り返れば未来」という思いを背景としたものであります。時代は大きな変革の渦中にあります。今後とも、歴史を大切にし生活のなかに生かしていかれる皆様方のご活躍に大きな期待が寄せられるものと思います。会員ご一同様のご健勝を心より祈念申し上げます。



温故知新

村上忠順翁顕彰会会長 石川 隆之

今年も村上忠順翁顕彰会は会員の皆様に支えられて各事業が順調に進み八周年を迎えることが出来ました。心より感謝を申し上げます。

豊田市は市制四十五周年を迎えて文化事業が展開されました。一つに昨年十一月十一日、オープンしました豊田市美術館は文化の発信地として今後活動が期待されます。

二つに「内陸工業都市として飛躍の発展を遂げ世界的な産業技術中枢圏の中核都市として役割を担うまでになった豊田市のその礎を築かれた。」「中村寿一、豊田喜一郎顕彰会」が設立され、その業績を後世に伝承することになりました。

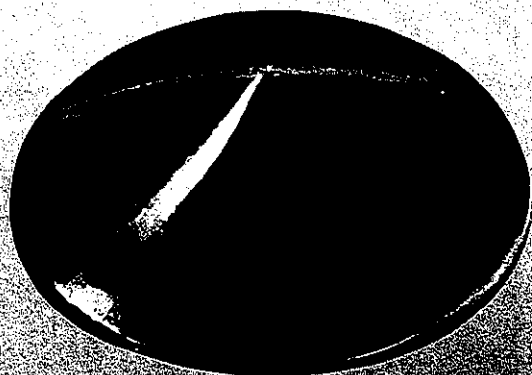
三つに豊田市教育委員会では周年記念事業として、豊田の文化財展を開催され、先人たちが残した文化遺産を保護し後世に伝えていく事業がなされました。

四つに地元堤地区において昨年度の「よいとこカルタ」に続いて七年度は「よいとこブック」が作成されました。郷土の歴史、文化、自然、人情などが綴られてガイドブックとして末永く地元で親しまれることでしよう。

当顕彰会も「忠順の足跡をたずねて」の歴史探訪は東征日記の足跡、短歌とともに、二川本陣、駿府城址登呂遺跡へ目帰りコースで天候にも恵まれ思い出の多い事業ができました。帰りに焼津のさかなセンターに名残惜しさのこして……。

本年も皆様の協力によって古い物事を調べ接し、そこから新しい知識や見識を引きだしながら活動することができました。ありがとうございます。

終りに会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたします。



村上忠順の和歌

——近世三河歌人研究——

築瀬 一雄

『和歌大辞典』（昭和六十一年、明治書院刊）に、忠順の項を担当した私は、次のように記した。

忠順^{ただ（じゅん）}（江戸期歌人・国学者）村上。字は承卿。号を蓬盧・四方樹、書屋を千卷舎^{ちまきのや}という。文化九年（一八三）四月一日―明治一七年（一八四）一月二三日、七三歳。三河国刈谷藩の医師である。植松茂岳・本居内遠に学び、歌は磯丸や石川依平の添削を受けた。

天保五年（一八三）から年次詠草が残っており、生涯に詠んだ歌数は五万首をこえる。『村上忠順集』（昭四）は文久二年（一八三）項成った自撰歌集から熊谷武至・築瀬一雄の抄出したものである。忠順の編著はすこぶる多く、刊行されたものに類題和歌玉藻集・詠史河藻集・類題嵯峨野歌集・三河の玉藻・千代古道集・蓬盧歌談・名所菜・雅語訳解拾遺・散木奔歌集標註・古

事記標註・標註古語拾遺・頭註新葉和歌集・天飛雁がある。またその集

書は著名で、現在刈谷市立図書館に

村上文庫として保管されているものは二五一〇四冊である。『村上忠順集第二紀行篇』『村上忠順集第三座右記』は村上家に残った資料の翻刻である。（以下略）

なお、忠順の和歌の集についての詳細の調査は、私の著作集の第五巻『近世和歌研究』（昭和五十三年、加藤中道館刊）の中に、「村上忠順の詠草類」という項目を立てて記しておいたので、必要の方はそれを見ていただきたい。前掲の『村上忠順集』は最晩年の自撰である二冊本の二六二四首から、忠順の歌風を知るためのものとして、故熊谷武至氏と私とで、約五〇〇首を抜いたのであった。これを使用して、具体的に作品を鑑賞し、私見による批評も加えてみることにする。

二

初春霞

咲きにはうあたりぞことに

かすむめる霞は梅の香より
たつらむ

題詠の歌である。作歌にあたっては、まず、題の要求する霞に重点を置き、その霞の根元として、梅花を想定したのである。この梅花は勿論題の初春の指定に答えたものである。

歌は三句切れで、上句は視覚によって梅花と霞の相関を捉え、推量の助動詞「めり」を用いて目前の事態の推量をあらわし、しかも、それを係り結びで強調している。これに対して、下句は推量の理由づけを、嗅覚と視覚の交錯という、極めて感覚的な設定をして、そこに初春の霞の美的存在としての価値を認めようとする作者の主観を表明しているのである。理を立てて解説すると、こうなる筈であるが、これも実は当時の作歌法に従ったものであり、これを享受する側も、軟かくふわっとした感じで受けとめたのであった。作品の内容を述べてみると、あゝ梅がきれいに咲いているなあ。霞がかかっている。そうか。霞はあの梅の香りから立ちのぼっているという訳か。

ということになるうし、読者はそれをなぞるように受けとめて、なる程うまいこと詠ってあるなあ、と肯定したことであろう。近世和歌の普遍

的な様相の好例として、詳しく解説してみたのである。

雪中若菜

つみすてて人はかへりし春
の野の雪まのわかなたづあ
あさるなり

田若菜

あしたづの水くだきし
跡とめて千代田の根芹
いざやつままし

若菜摘みは、春の行楽として欠かせないものであった。従って、四季を揃える題詠では、必ず詠むべきものの一つであった。その若菜は若々しく生氣に満ちており、それを摘むことは、わが生命の若反りを祈念しその年の幸せの到来を予祝する古来の民俗によるものである。従って、誰もが同じような気持で詠うためにとかく類型的になり易い。更に又、若菜摘みを細分化して、雪中若菜とか田若菜とかすることも、一般的になっていた。そこで、作者は若菜摘みを、若菜を摘む人だけの行為にとどめないで、これも瑞鳥として人々に親しまれている鶴との組み合わせを考えたのであった。若菜摘みの人の帰った後で、鶴も若菜をあさると云ったり、芦田鶴が早春の水をくだいて、若菜をついばんでいた。そっだ。

われわれも根柢を摘もう。こうして人と鶴との相関によって、少しでも作品に特殊性を加えようとしたのである。この二首は別々に詠まれたものであるが、同一作者が詠んだものを、こうして並べてみると、作者の意図がはっきり見えるので、そこが面白いと思ったから、このように併せて鑑賞したのである。もう一つ付記しておく。第二の歌の千代田は、昭和の世界では、案外に用例の乏しい語である。江戸城を千代田城とい

が、これには関係はない。鶴は千年の壽を保つとする目出たさを喚起する気分からの関連語として採択されたのである。だから、千代も続くであろう田の意の普通名詞で慶賀の気分を増幅させたのである。

春雪

かきくらしちるや軒ばの
梅がえにふり争へる春の
あわ雪

この歌は、梅の花の散るのと淡雪の降るのを、その入りまじった情態で捉えて、擬人的表現で詠っているのである。であるから、普通の写生ではなくて、作者の美意識を優先させて、脳裏に一幅の画を組み立てたものである。初句の「かきくらし

」も、実況であるよりも、心象風景としたが、作者の意図に近づき易い。

江上春曙

みわたしの汐の八百会の
あけ初めて入江かすめる
朝月夜かな

八百会は「やはあひ」で、ものの多く集ること、殊に海の潮目の多い状態をいうのに用いるのが常である。

この歌は、海の入江の早朝の霞の様を、写生風に詠っている。題詠ではあるけれども、かつての体験が活かされているように思われるのである。上句に「の」の音を重ねて、リズムに乗った写生句を作り、それが夜の明けて行く時間帯の気分を盛り上げるのに、有効に働いている。そうした前提をふまえて、夜明けのポインとなる残月を出して来る呼吸は仲々手に入ったうまさ認められる。日本の風景の美しい一つの形が、この様にして組み立てられた訳である。これはこれで、一つの成功した作品と見ることが出来る。

燕

朝戸やる袂のしたをくき出でて
門の柳にとぶつばめかな

初句の「やる」は押しやる意である。朝、雨戸を繰って明ける動作である。「くき出でて」はくぐり出る

意である。「くく」という語は、せまい間をもれる、くぐるなどの様をいう語で、ここでは、それが「出づ」と複合して、燕の動作を写している。戸締りの内側に巢をかけた燕が、朝、人の戸を開けるのを待ちかねて飛び出る生態をそのまま詠ったのである。軽い作品ではあるが、日常詠としてよいと思う。

首夏

軒ちかき桑もしげりて賤の
めがこがひいとなき夏は来
にけり

首夏の首は、はじめの意である。「桑も」の「も」は並列の意を示す助詞で、わが家の軒端の一本の桑も桑畑の桑と同様という意である。

これは作者が桑を必要とする養蚕とは、直接関係がない立場にあることを示すためのいい方である。「賤のめ」は農家の女を指す一般的な語で、「賤」に特別な蔑視がこめられている訳ではない。「こがひ」は養蚕、「いとなし」は忙しい意の形容詞である。この一首は、身近な桑の木、茂った様に気付いて、農家の多忙なシーズンの到来を思いやり、首夏という題の答えとしたのである。特にほめる程の作品ではないけれども、頗る健康な日常性が基盤にあっ

て詠み出される作品という感じがして、私には無視したくないのである。「賤のめ」の語を取り上げて、土農工商の身分差別をいい、階級制度を論じるのは、場ちがいというものである。

路夏草

夏野行くみしますが笠誰ならむ
しげる薄にみえかくれして

路の夏草という題をこなすのに、点景人物を加えて、写生を動きのあるものにしたのである。それは、作者の向う側にある材料の工夫であるにとどまらず、見ている立場にある者の心の働きとなって、そのために歌に一段の面白味が加わったのである。勿論、この歌は、全体が軽い感じのものであるが、この軽さを喜びとする生活の平穩を無視したくないと思うのである。

夏鳥

そに鳥の鳴くこゑすゞし川
ぞひの柳がもとを行きかへ
りつ、

写生の歌である。「そに鳥」はかわせみの別名である。どこでも見かける風景であるけれども、このように、さばさばと詠い流されると、悪くないなあと思う。対象にほれ込んでいる作者の気持が、そのまま読

者に伝わってくるからである。

朝顔

夕日かげさすや垣ねにあす
さかむつばみかぞふる庭の
朝がほ

誰にでも判る歌である。今日では生活の様式が違つてしまつて、こうはいかないと思うが、戦争以前の一般家庭では、多くの人が体験したことである。日常の幸せをこつとした形で受けとめ得た時代が、明治以前から大正・昭和と長く続いたのであつた。詠い方に特別な工夫がある訳ではない。平穩な作者のまなざしが、そのまま表現されていて、それが、読者であるわれわれにそのまま伝わってくる。そこが楽しくうれしいところである。決して、平凡だといつて、退けるべきではない。

鳳仙花

たをやめがけはふ雫や落ち
つらむつまくれなるの花咲
きにけり

鳳仙花のことを、「つまべに」「つまくれなる」というのは、昔は、爪を染めるのに、この花を使ったからである。「けはふ」は化粧すること。であるから、この歌は鳳仙花の花の姿を見て、逆に、これはかよい女の化粧の紅が雫となって、花を

染めたのであつたと、見立てたのである。こうした見立てを面白いとするか、どうか。人それぞれに好悪が分れるのはやむを得ない。私は「つまくれなる」という言葉の持つ味がこの歌にかなりうまく出せていると思うので、よしとしたい。

社頭月

神垣のさかきのこのまかつ
もりてよるべの水にすめる
月かけ

神社のほとりの月を詠えという題に答えた歌である。「よるべの水」というのは、今日ではほとんど見かけなくなつたが、神前に供える甕の水である。この歌では、もう一か所わかりにくいところがある。それは「かつもりて」の「かつ」である。この副詞はいろいろの意に用いられるからである。一方では、次々に、わずかに、既になどである。これらを、一つずつこの歌に当てはめてみると、「わずかに」が一番ふさわしいように思われる。さて、こうして一首を眺めてみると、やや細かい道具立てが気になるけれども、神域の感じはちゃんと目に浮かんでくる。神道に深く心を傾けていたこの作者の敬虔な気持が伝わってくるのでよしとしたい。

鳴

朝月夜さすや門田のおとし水
さびしくも有るか鳴の羽がき

夜の明け方の月が照っている。家の門前の稔り田では、水を落す音が響いている。ふと目をやると、鳴が一羽羽づくろいをしている。ああさびしいなあ。こうした情景を詠ったものであるが、この歌の背後には、鳴の羽掻きという成句が恋の気分に結びつく伝統の存することを知っておく必要がある。例示すると、古今和歌六帖第六にある。

暁のしぎのはねがきもは
がききみがこぬよはわれぞ
かずかく

あかつきのしぎのはねがき
ももはがきかきあつめてぞ
わびしかりける

の如くである。こうした気分とうまく融合させるのに役立っているのが第二句の「さすや」で、それは月光の射すのと、孤独に門を閉して暮していると設定された作者のポーズとを、合せて示しているのである。しかも、「さびしくも有るか」が、水の音と、鳴の姿との両方に通用させてある。かなり神経を細かく働かせて技巧的な歌であるけれども、嫌味になつていない所がよいと思う。

初冬時雨

かたぶける門田のはつ木は
つ／＼に時雨ふり来ぬ神無

月とや

第三句の「はつ／＼」は、僅かにという意の形容動詞「はつはつなり」の連用形で、時雨の状態描写である。そして、この語を出すために、第一・二句は序詞となつてゐる。しかも、それはいかにも農村らしい具象的なもので、時雨の降りさまを活かすのに役立っている。「はつ木」は泊木で、上部が二股になつた竿でここでは稲架（はぎ）が使用された後に放置されて、傾いていると見ればよいであろう。末句は独立句である。「とや」は詠嘆をあらわす連語で、上からの描写を受けて、「ああ神無月になつたなあ」と、冬の到来に、しみじみと思いを込めた表現である。題詠ではあるけれども、農村の景と情が実にうまく表現できている。

夜雪

雪ふかくつもりにけらし小
夜更けてし／＼まになりぬみ

ねの松風

この歌は、第二句で切つて、そこに推量の助動詞「らし」を置き、第三句以下で、その推量の理由を述べ

る形をとっている。これは、和歌定型の代表的な一つである。そして、これだけではないにも平凡になると考えたのであろう。後半部を倒置法にして、変化と一種のリズム感を加えている。更に注意したいのは、松風が聞こえなくなったことを、「しづまになりぬ」と、まるで、しやべっていた人が口を閉じたように、無言になったと表現している点である。これは所謂擬人法の効果をねらったものである。こうした手法によって松風を黙らせた夜の雪、いや、雪も松風も、夜全体が作者の感性に柔かく受けとめられていることが判る。内容は、事柄としては、むしろ日常的な体験であるが、こう詠われると嫌味の無い、気分の徹ったものとして、素直に味わうことが出来る。よい歌と認めたい。

炭竈

ことさらにけぶり立つみゆ
この夕口やあくらむみねの
すみがま

普段見なれていた風景の一部に、常とはちがった様を発見して、おやっと思うとともに、嘗ての経験から或る活動的な情況が浮かび上って来た。こうした、実況と推測される場面との連鎖が面白い。但し、炭竈の

口を開けるといふ、冬の山の生活の具体的な印象が、こう詠っただけでは、未経験な読者には、その強烈なインパクトは伝わってこない。全体が説明であるからである。

寄船恋

いかにせむあしをわくる
はし舟のさはりがちにてこ
がれぬる身は

題詠の恋歌は、言葉遊びに陥り易い。殊に寄物の条件が付くと、その物の縁語で仕立てる傾向が強くなる。この歌も、その例にもれない。恋路の苦悩を、声間を分ける端舟（小舟）になぞらえただけである。「これがれ」が舟の漕がれと、恋にこがれとの掛け詞にしてあるが、これも平凡と云うはかはない。忠順のように、多くの撰集を編集する立場にあるものが、自分でもこうした歌を詠むところ、停滯しきった近世和歌の普遍相が、あらわに現れている。その例証として、この一首をあげておくだけで、決して、よい歌というのではない。

思賤女

人にこそくつかひにとはこ
たへつれ矢作の市女こひし
かりけり

これも題詠の恋歌である。作者の

生活に即した歌ではない。題の「賤女」が、歌では「市女」にしてある。市女は市で物を賣る女で、遊女ではない。「村上忠順集」で、第二句の「くつ」に濁点を打つたのは誤植であつた。「くつ」は、足をすっぱり入れる履物を一般にいう語で、明治新題の洋靴ではない。さて、この歌人から「お出かけですか」と声をかけられて、咄嗟に答えて、その場をごまかしたのだが、と身分がいの恋にある人物を設定して題をこなしただけである。この軽みを認めれば、まずはよろしいということになるであらう。

讀書延齡

朝にけによめどもあかぬふ
みこそは千年へぬべきい
く
葉なれ

本を読むと、生命がのびる——読書家忠順にとって、ぴったりの題である。こうした題を得て、古典こそは起死回生の薬であると詠ったのである。これは謡曲養老に「げにや尋ねても、蓬が島の遠き世に、今のためしもうぐすり」とあるように、蓬萊伝説からの用語をとったのである。忠順が医を業としたことは係らない。さて、この歌は、極めて平明に思うところを述べたものである

が、書物を愛し、その山に埋れて暮した作者の面影が、まぎれと浮かんでくるような作である。題詠であっても、無理な作り物ではないからである。

書籍おほくもとめたる時
いまは世になにかもとめむ
よねたらひ書は車に引きあ
まりけり

これは題詠ではない。忠順の生活の中から生れた歌である。こうした歌を見ると、自分の生活に満足感を漲らせて詠えた彼は、実に幸せな人であつたと、いわざるをえない。歌の下句が大げさなように見えるかもしれないが、これは実際のことで、岡崎の書肆本文からは、こうした買い方をしたと伝えられている。そこはなるほどと思ひ、はじけるような作者の喜びを肯定しようと思うけれど、たた一か所、「よねたらひ」については、私は讃成しない。橘曙覧のように貧窮をあらわにするのも好きではないが、安定した生活を示すのに、こうしたいい方をされるのもいやである。

三月つごもりがた了観法師
が京へのぼるわかれに
花はちり君はいでたつあす
よりは永き春日をいかにか

もせむ

親しい人に対する愛情のこまやか
さが出ていて、よい歌だと思ふ。旅
の別れが、一般的な、形式的な惜別
のレベルから、一步ふみ込んだ真情
として詠われているからである。了
観は、忠順の家からさほど遠くもな
い竹村の光恩寺の僧である。忠順の
門人録によると、天保十三年三月に
入門している。安政六年に示寂した
が、その時五十一歳であったから、
忠順よりは三つ年長であった。光恩
寺は眞宗大谷派であるから、了観は
しばしば上京し、その都度、忠順の
依頼を受けて、京都の書店で書籍を
さがしたようである。恐らく忠順に
とっては、弟子の中でも、最も身近
かな、心の許せる人であつたろう。
そうした人間的な情というものが、
自然に流露したリズムに乗っている。
私には、そこが捨てがたい魅力に見
える。

三月七日庭の桜のちるを
みて、篤慶忠明など旅に
あるを思ひて
庭ざくら雪とふりしくみよ
し野の吉野の山はいまかさ
くらむ
ともなはぬ事こそいまはく
やしけれ飛びてもゆかむみ

よし野の山

くやしきもおくれぬるかな
この夕した臥すらむ花の木
かげに

深見篤慶は忠順の長女年之の夫で
ある。忠明は忠順の次男である。忠
明は慶応元年に没したので、この歌
はそれよりも前の春ということにな
る。忠順は家に残っていて愛弟子と
息子の吉野旅行を思いやり、同行し
なかったくやしさを詠ったものでは
あるが、いずれの歌も、内容を直接に
詠っただけで特にすぐれたものとは
いえない。しかし、中では最後のも
のがよいと思う。「した臥」は桜の
木の下に寝ることで、花見の極地を
あらわしている。二句切れと、下句
の倒置法表現の対応も、計算された
だけの効果はあげていると認めたい。

忠順と駿府城

忠順の「東征日記下」(慶応四年
三月)によれば、忠順は大総督有栖
川宮よりご用があるゆえ急ぎ駿府御
本陣迄罷り出るようにとの達しを受
け、三月二十二日に三河をあとに駿
府へと発足し、三日後の二十五日に
は駿府に着いています。

残念なことにこのあたりの日記
(東征日記上)が現存せず子細がわ
かりません。忠順の東征は、有栖川
大総督の足跡との係わりと、あわた
だしい時代の背景からも察すること
ができます。又、駿府城の年表にも
付合するものであり、その概要は次
のとおりです。

慶応三年十二月九日

王政復古宣言発せられる、大政
奉還

四年一月七日

徳川慶喜追討令

四年二月十五日

有栖川大総督宮駿府城に入る

四年三月十三日

勝、西郷隆盛と会談、江戸城開
城の諒解なる

四年三月二十五日

(忠順駿府城に入る)

四年四月十一日

江戸開城、慶喜水戸へ退去

四年四月十五日

(忠順江戸城西の丸入城)

四年九月八日

明治と改元

さて駿府城の歴史は再三の火災と
家康が十九歳まで人質として過した
城でもあります。

駿府は、三方を山に囲まれ、南は

駿河湾に面して開け、豊かな自然に
も恵まれて、登呂遺跡に見られるよ
うに有史以前から人々の生活があり
ました。又、古代から国府がおかれ
駿河国の中心として栄え、室町時代
に初代今川範国が駿府国の守護に任
命されて以来今川氏の領国の一つと
なりました。今川氏全盛期の九代義
元の代に家康(竹千代)は、この駿
府城で人質として十二年間、十九歳
までを過しています。ここで家康が
天下人へと成長していく過程で臨濟
寺の住職太原雪斎などから種々の教
えを受けており家康の人間形成の上
で重要な時期を過したことになります。
永禄十一年十代今川氏真は武田
信玄に攻められて掛川に落ち駿府の
町は焼き払われます。さらに天正十
年には、家康が駿府の武田勢を攻め
再び戦火にあい中世駿府の町は完全
に失われてしまします。駿河国を領
国とした家康は天正十三年から居城
として駿府城の築城を始め同十七年
に完成させます。しかし翌年には秀
吉により関東に移封されます。

慶長八年家康は征夷大將軍に任ぜ
られ江戸城を開きました。慶長十年
に將軍職を二代秀忠に譲り駿府を隠
居の地と定め、七五年の生涯のうち
二十五年を駿府で過しています。

お 便 り

拝啓

お変わりありませんか、天候も不順で
すし、世間も物騒で困ったことです。
先便で申し上げた村上忠順の和歌が
出来ましたので差し上げます。次の
会報におのせ下さい。

最近体調を崩すことが多く、い
よ／＼歳かなと思います、要心して
旅行は一切やめています。原稿書き
だけはまだ出来ますのでボチ／＼や
っています。乍末筆御自愛專一に
願います。

七月十五日

染瀬一雄

右のとおり先生よりお便りとも
に大きな封筒が当顕彰会の事務局へ
郵送されて参りました。

その中味は、「村上忠順の和歌」
四〇〇字詰め原稿二十二枚、二十六
首を選んで、それぞれを鑑賞し、批
評が加えてあるものでした。

有難く、早速今回の会報に紹介
させて頂くことにしました。

ご厚意により忠順翁の歌が一層私
たち会員の身近なものとなりました。
先生のご配慮に改めて感謝します。

歴史探訪記

— 忠順の足跡をたずねて —

歴史探訪は、回を重ね今回で、第
七回となりました。

今回は、村上家に保存されている
忠順の旅日記「東征日記下」をとり
あげて、その足跡をたどりました。

歴史探訪は、毎回会員の皆さんの
感心が強く、今回もバスは定員一ぱ
いとなり、晩秋を迎えた十一月二十
二日の早朝、前林公民館前を出発し
ました。今回はテーマを「東征日記
の足跡、短歌とともに駿府城址、二
川本陣、登呂遺跡を探訪」と定めて
の紀行でした。

東征日記下は、すでに発行した忠
順翁顕彰会報第三号と第五号にその
全文を掲載しましたが、今一度その
概要をふり返ってみたいと思います。
慶応四年（一八六八年）三月二十一
日、刈谷藩に願ひ書を出した忠順は
その翌日駿府へと発足します、この
とき忠順翁は五十七才でした。とし
て二十五日には駿府入りをしていま
す。あまりの早や足です、何にか乗
物を利用したのではないのでしょうか。
四月十五日には、江戸西ノ丸へ入
城し用務を終へ六月七日、人々の待

つ堤の里着、翌八日刈谷へ。と日記
にしている。又、忠順はこの
日記に多くの歌を詠んでいます。



(駿 府 城 址)

さて、私たち一行は、今日のため
に編集した案を参考に旅をつづけ、
往時を忍ぶ駿府城の石垣や選櫓など
を見学し、城内を散策しました。お
堀の水面に淡く落された石垣や櫓の
影は心に深く焼き付き、忠順を偲ぶ
に足りる風情を留めていました。

江戸を立つ

すみずみ、立別るとも君が為

千代田の大城千代に八千代に

岡崎に着いて

六月のてる日に消ぬあは雪は

ふじのねよりや吹おろしけん

次に、忠順が度々通ったであろう二

川宿は、本陣、脇本陣が置かれたと
ころで現在は、資料館として整備さ
れていました。親切な説明に耳を傾
け、歴史資料を見学しました。

更に、もう一つの期待、それは登
呂遺跡の見学でした、ここで昼食
（めんば定食）をとり、各自、遺跡
もよし、芹沢美術館もよし、登呂博
物館もよしと、三三五五に分れて見
学しました。日も午に至り一日の探
訪を終え、それぞれみやげを手に一
人の事故もなく無事に逢妻の里へ帰
ることが出来ました。

表紙のことば

駿府のお城、ここは忠順翁が一二
七年前に足跡を留めたところ、再三
の火災で焼かれたお城、そして家康
公ゆかりのお城、平成の今は、石垣
だけが知っている。

編集後記

二十一世紀まであと五年、顕彰会
十周年はあと二年。大きな一つの節
目でもある、そして節目は、未来に
向けてのけじめでもありその意義は
深い。さて、今号掲載の忠順翁和歌
の歌風を知るためとお寄せ頂いた
染瀬先生の鑑賞と批評は、皆さんも
なる程と感銘されることでしょう。